

はじめに

平成 26 年 12 月に示された次期学習指導要領を先取りした『広島版「学びの変革」アクションプラン』は、平成 30 年全県展開に向けて着実にその歩みを進めている。本年度は具体的に皆実コンピテンシーを定め、その育成を目指した主体的な学びを充実させることが、私たちの責務であることを教職員全体で確認できた。生涯にわたって学び続ける生徒を育成するために、生徒にまず何を身に付けてもらいたいのか、そのために私たちは何をなすべきか、校内で試行錯誤しながら実態に則した議論の中に皆実らしさが生まれつつある。活用コアスクールの指定と相まって、「私たちが授業の質を上げることこそが生徒の将来に生きてくる。」という当たり前のことが、私たちが本来持っている授業にかける心意気をさらに前面に押し出してくれたと感じている。

すべての評価は、する側も受ける側も元気の出るものでなくてはならない。指導と評価の在り方を授業と評価問題の一体化と捉え、授業ごとに目標・内容・方法の 3 つの柱を明確に意識して前に進めていただきたいと思っている。すなわち「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を丁寧に深く整理する必要がある。これらを意識した、我々が発する ICE を見極めた「問いの質」こそが今後の大きなテーマとなるであろう。

校内の推進体制は、アクションプラン・プロジェクトチーム、教科主任会、各教科会の三つで組織され、これらは順調に機能的にリンクすることができている。各教科の若手で組織されたプロジェクトチームは、校内指導者の下でカリキュラム開発の先行事例研究や授業実践を担い、時には提言も行う。今年度は体験型パフォーマンス課題にも着手している。教科の中で先輩が後輩を鍛えるという根本原理が浸透することを願いながら、教科主任会や教科会での議論の熟成が図られるようになることを大いに期待している。その時、歩は大きくはないが着実に確実に前進していることを一人一人が実感できるようになり、推進力は増してくるはずである。

私たちは専門の教科を持ち、それを頼みとして生きている。生徒に直接的・間接的にかかわる授業こそが私たちの主戦場であり、その場で生徒諸君に最も輝いてもらいたいと心から願っている。その面でも「Team MINAMI が全国レベル」の本領を発揮してほしいと思わずにはいられない。

平成 29 年 3 月

校 長 隠澤 浩雄